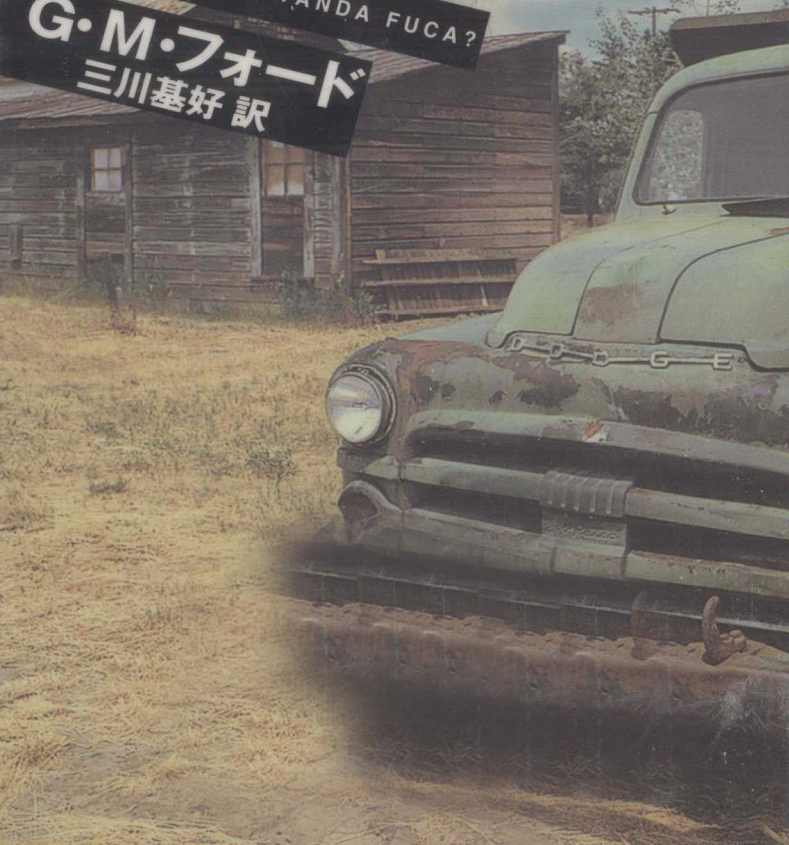


# 森の負い手

WHO IN HELL IS WANDA FUCA?

G・M・フォード  
三川基好 訳



訳者略歴 1950年生，早稲田大学  
大学院修士課程修了，早稲田大学  
文学部助教授 英米文学翻訳家  
訳書『ハリーの探偵日記』ペドラ  
ザス（早川書房刊）

HM=1

NV=Novel  
NF=Nonfiction  
FT=Fantasy

て お もり  
手 負 い の 森

<HM②①-1>

九九七年五月二十日 印刷  
九九七年五月三十一日 発行

（定価はカバーに表  
示してあります）

著 者 G・M・フォード

訳 者 三 川 基 好

発 行 者 早 川 浩

発 行 所 株式 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二ノ二  
電話 〇三三三二五二二 代表  
振替 〇〇一六〇三二四七七九

郵便番号 一〇〇一

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。  
送料小社負担にてお取りかえいたします。

印刷・星野精版印刷株式会社 製本・株式会社明光社

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-171001-9 C0197

江苏工业学院图书馆

藏书章

<sup>m</sup>  
h

日本語版翻訳権独占  
早川書房

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

# WHO IN HELL IS WANDA FUCA?

by

G. M. Ford

Copyright © 1995 by

G. M. Ford

Translated by

Kiyoshi Mikawa

First published 1997 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by

direct arrangement with

BERNARD SHIR-CLIFF LITERARY AGENCY.

手負いの森

## 登場人物

レオ・ウォーターマン……………私立探偵

ティム・フラッド……………依頼人

フランキー・オルテガ……………ティムの部下

キャロライン・ノーベル……………ティムの孫娘。〈地球を救え〉のメンバー

ロバート・ウォーレン……………キャロラインの恋人

ハंक・ディクスン……………ウォーレンの友人

ダニエル・ディクスン……………ハंकの父親

チャールズ・ヘイデン……………環境保護局の監察官

トム・ローマンズ……………環境保護専門家

ブランチ・ハマー }……………環境保護論者  
ユニス・ハマー }

バディー・ノックス }……………レオの助手  
ハロルド・グリーン }  
ラルフ・バディスタ }  
ジョージ・パリス }

ヘクター・ギテレス……………アパートの管理人

サーシャ・ケネディ……………ソーシャル・ワーカー

レベッカ・デュバル……………検死官

ジェド・ジェイムズ……………弁護士

ヴァン・ベルト……………地方検事補

ビル・トラスク……………刑事

「ほうつといってくれ」懇願するように、男は言った。「なあ、頼むからほうつといってくれよ」  
氣づかれないようにそつと、私は窓枠ぞいに相手の方ににじり寄つた。だが、相手は氣づいた。  
「来るな。少しでも近づいたら、飛び降りるぞ。わかつたか？」

「ああ、わかつた」私は言った。「すわろうとしただけだよ。足が痛くなつたんだ」

トマス・グリアは、ビルの壁に張り出した幅十八インチのコンクリートの上に立っている。  
高さ十四階、目の下は三番街だ。両手を横にのばして手の平を壁にぴったりつけ、指で手がか  
りとなるような隙間や割れ目をまさぐっている。薄茶色の化粧煉瓦で覆われた壁に力一杯背中  
を押しつけ、まるでその中にもぐつていこうとしているようだ。あれで両足を重ねたら、十字  
架のイエス・キリストだ。

彼はそれ以上口をきこうとしなかった。だが、本気で飛び降りたいとも思っていないようだ  
った。別に確信があつたわけではないが。無理に近づくのはやめて、専門家たちが到着するの

を待った。ずいぶんごめつくりだ。近頃ではビザの方が警察より早く来る。

ホテルのマネージャーが戸口に立つて、窓と廊下の両方に目を配っていた。廊下の奥にエレベーターがあるのだ。彼の首は、テニスのネット際の応酬でも見ているように、せわしなく左右に動いている。この陽気なのに、彼のグレーのシルクのスーツには何カ所も汗のしみができている。私は飛び降り自殺志願者に目を戻した。窓から少し身を乗り出して、相手の気を静めるように話をしてみる。

「ねえ、グリアさん、あなただつてこんなことしたいわけじゃ……」言い終わらないうちに、間違いをおかしたことに気づいた。相手もすぐさま反応した。

「どうしておれの名前を知ってるんだ？」彼は言った。下の道路をじつと見つめたままだ。

「どうして知ってるんだ？」

「まぐれ当たりですよ」我ながら説得力がない。

「おれたちを探してたのはおまえだな。そうだ、女房に雇われたんだろう。そうだろうが」

「中に入りなさい、グリアさん。あなただつてこんなことしたくはないでしょう。こんなことしたって何にもなりませんよ」聞いていない。

「あの女。<sup>おま</sup>くそつたれが。あいつに雇われたんだな」彼は初めて私に顔を向けた。本当に飛び降りはいらないだろうと思っていたが、その顔を見た途端に考えが変わった。あの目の表情には見覚えがある。心の中で何かが壊れ、今この瞬間のことしか考えられなくなっているのだ。私は話しつづけた。

「どんな問題があるにしても、こんなことで解決はできないでしょう。それどころか事態を悪くするだけです。こんなことで息子さんの記憶に残るなんて嫌でしょう。父親の思い出がこんなだなんて、ひどすぎるじゃありませんか。さあ、こっちへいらっしゃい」私は相手の方へ手をのばした。彼は横歩きして二フィート遠ざかり、そこで止まると、今度は横歩きで戻ってきて、私の方に手をのばした。その目にははつきりと破滅的な表情が浮かんでいる。

私はのばしていた手を引っ込め、両手で窓枠をつかんだ。

「こっちへ来い」彼は叫んだ。「来いよ」上体を曲げて、私の方に手をのばしている。「金が欲しければ、おれを殺して稼げ」

私は首を振った。彼は身体を起こすと、元のように壁に背中を押しつけた。

「中に入りなさい、グリアさん。誰のためにもなりませんよ。確かに今はお先真つ暗に思えるかもしれない、でも……」

シアトル市警察の到着で、私のおしゃべりは中断した。制服の警官がホテルのマネージャーを戸口から押しつけ、ふたりの刑事と女性をひとり、部屋に通した。

背の高い方の刑事には見覚えがある。目鼻立ちの大きな顔、赤みを帯びてたるんだ皮膚、常にあたりの臭い（におい）を嗅いでいるような、横に張り出した鼻の穴。一度見たら忘れない顔だ。すべてがごわごわしわくちゃで、洗ったままぼうっておかれた洗濯物のようだ。歳は五十かそこら、髪を短く刈り込み、前歯の間には四分の一インチほどの隙間がある。何の関心もなさそうに、くぼんだ目で室内を見渡した。トラスク、確かビル・トラスクだ。どこで会ったのか思い出そ

うとしたが、そのときは集中して考えることができなかった。

彼の相棒と女性とは初めて見る顔だった。女性は警官ではない。三人はドアを入ったところで立ち止まり、私を手招きした。私はトマス・グリアに声をかけた。

「すぐに戻りますから、グリアさん。そこにいてください。いいですか。動かないで。すぐに戻ります」

「戻ってこなくていい。おまえなんか、どこへでも行つてしまえ」吐き捨てるように、彼は言った。

ゆっくりと窓際から離れると、私は警官たちのところへ行つた。女性は青いウールのロングコートを脱いでいるところだった。脱いだコートをきちんとたたむと、そばにある乱れたままのベッドの上に置いた。三十五歳ぐらい、赤い髪は生まれつきのものだろう。こぢんまりした目鼻立ちが、大きな眼鏡のせいで余計小さく見える。鮮やかな青のツープースのスーツを着て、小学校の女教師といった雰囲気だ。ただし目の表情は違う。その目の縁には細いしわが刻まれ、そばかすのある高い頬骨へと延びている。

背の高い刑事が、口火を切った。明らかに彼の方が私より記憶力がよかった。

「あんたに金を貸してた男が、とうとうしびれを切らしたわけか、ウォーターマン？」私が無視していると、彼は紹介を始めた。

「レオ・ウォーターマン」私の方を向いて、彼は尋ねた。「レオだったよな？」私はそうだと答えた。「こちら、サーシャ・ケネディ。地域福祉局のボランティアの方だ」

その口調の意味するところは明白だった。大方の警官がそうであるように、彼もソーシャル・ワーカーが大嫌いなのだ。

「ケネディさん、こちらレオ・ウォーターマン。確か私立探偵と称していたような気がしますな」

彼女が私に尋ねた。「どんな状況なの？」

「やつは本気だと思いますよ」私は答えた。

「みんな本気よ。本気でなくて、あんなところに出ていくものですか。あなたはたまたま近くにいたわけ？ それともあなたも一枚かんでいるの？」

トラスクが我慢できずに口をはさんだ。「私立探偵がたまたま近くにいただけなんてことはないですよ。こいつらはいつだって一枚かんでいるんです」

「ここは私にまかせていただきます」彼女はぴしゃりと言った。「あなたとこちらの刑事さんは、廊下に人が集まらないようにして、屋上の救助隊と連絡をとってください」

刑事たちがしぶしぶ部屋から出ていくと、彼女は私に向き直り、さっきの質問を繰り返した。

「どんな状況なの？」

「子供の養育権争いですよ」

「父親の負けだったのね」

「彼はそう思っているようですね」

「説明して」

「名前はトマス・グリア。週末と一緒に過ごすということで、十日前にスポーカンから息子のジェイスンを連れてきて、そのまま返さなかった。母親の依頼で私がふたりを探しました。彼女の場合、役所に訴えてもあまり親身になつてもらえそうもない事情がありましてね。で、ゆうべ、ふたりがこのホテルに泊っているのをつきとめたわけです。今朝、ふたりが朝食をとりに出たときに、子供を父親から引き離しました。子供は今、ホテルの警備員が保護しています。あのグリア氏は……」私は窓の方を指し示した。「見かけよりすばやい動きを見せまして、私に捕まる前に部屋に取つて返して、中から鍵をかけてしまったのです。それからあとは、ご案内の通り」

「子供はどこなの？」

「下の警備室で面倒見ってます」

「あなたの依頼人は子供がみつかったことは知っているの？」

「ゆうべ電話しました。そろそろこちらへ着く頃でしょう」

「彼女をここへ連れてきましょう」

「それはやめた方がいいですよ」私は言った。

「どうして？」

「グリア氏は、悪いのはすべてその別居中の妻だと言っているんです。その女性とは私も会ったことがありますね、彼の言うのも一理あると思いますよ。彼をあそこから連れ戻すという目的には、彼女はあまり役に立たないでしょうね」

「それは私に判断させてください、ウォーターマンさん」

「だめです」私は言った。彼女を目を大きく見開いた。思うに、おそれ多くも彼女に向かつてそんな不遜な台詞を吐く人間には、もう長いこと出会ったことがなかったのだろう。

「だめです、ですって？　今あなた、だめですと言った？　あなたには今の状況が理解できないのね、だから……」

「状況は十分に理解しています。三十分近くあの男と話をしていたのですから。どんな状況か、話してあげましょう。あの男は稼ぎは悪くない、それなのにバラードのきたならしいちっぽけなアパートに住んでいる。なぜか。彼はしごく当然の訴えをしたのに、女房の雇った弁護士の方が腕利きだったからです。そして、女房は挨拶もなしに息子を引きさらって、州の反対側へ引っ越してしまった。彼がどんな思いをしてきたか。息子と話がしたくて電話をかけると、そのたびに息子の母親の新しいボーイフレンドが電話に出るんだ。毎回、別の男がね。いいかげんこけにされつづけて、自分もひとつ何かやってやろうじゃないかという気になった。それがあのワンマンショーですよ。あと足りないのは演<sup>だ</sup>し物にふさわしい観客だけ。別居中の妻というのがそれなんです。私の言う通りにしてください」

「あなた、心理学の学位をお持ちなの？」返事も待たずに、彼女は続けた。「そうじゃないよ。ね。私は臨床心理学の修士号を持っているのよ。それに……」

「ああ、立派な資格をお持ちですね。私の方は無責任学士で自己憐憫の終始号、というやつですがね。でもね、これだけは確かですよ。目当ての観客さえ揃えば、あいつは高板飛び込みよ

ろしく真つ逆さですよ」

「さあ、どうかしらね」彼女はこう言うと、窓に近づいた。

窓枠に腰を下ろし、身を乗り出してグリアに何か話しかけている。何を言っているのかは聞き取れない。彼女はさらに身を乗り出し、そばかすのある太股があらわになった。まだ何か言っている。そのとき、廊下の方で物音がした。

さつきとは別の制服警官がふたり、そして救急隊員がふたり、黙って部屋に入ってきた。窓の外の相手から目を離さずに、サーシャ・ケネディは片手を上げて、静かにしろと合図した。全員がその場に立ち止まる。今度はグリアの言っていることがかすかに聞こえてきた。

「あいつに会わせろ。ここに連れてこい」次が聞き取れなかったが、そのあとで「そうだ、あの女だよ」と言うのが聞こえた。

しきりに手を動かして相手をなだめるような仕種をしてから、窓枠を降りて部屋の中央に戻ってくると、彼女は私に向かって言った。

「奥さんの電話番号、知ってるのね？」

「今はマグノリアの兄の家に泊っている。ただ、私の考えでは……」

「考えなくていいの、あなたは。その電話番号は？」

上着のポケットから手帳を取り出し、番号を読み上げようとすると、彼女がいきなりその手帳をつかんで近くにいた警官に渡してしまった。

「どこか空いている部屋から電話しなさい。奥さんをここに呼ぶのよ」こう命じられて、警官

は大急ぎで部屋を出ていった。彼女はもうひとりの警官に向かって言った。

「ウォーターマンさんには廊下で待ってもらいます」警官が私の肘をつかもうとした。私はその手を払いのけると、正面から相手の顔を見た。若い男だ。金髪で首が太い。髭はまだ一日おきに剃れば済んでいるのかもしれない。彼がまた私の腕をつかもうとした。私は腕をのぼして相手の身体を押し、二、三步後退させた。彼の手が腰の拳銃の方に動き、そこでためらっている。戸口から声がして、にらみあいには中断した。

「落ちて着け、イーガン」トラスクだ。「そんなもの抜いた日にゃ、いったい何枚書類を書かされるはめになるか、わかってるのか？」イーガンは目をぱちくりさせた。彼は身体の力を抜くと、私に一步近づいた。

「落ちて着けと言っただろう」トラスクはゆつくりと若い警官に歩み寄った。「銃を抜いただけでも、それ用の書類に書き込まなきゃならんのだぞ。書類の山だ。嘘じゃない。山ほど書かされるんだ。このウォーターマンてのはな」彼は私の方に向かって親指を突き出した。「そんな手間をかけてやるようなやつじゃないんだよ」彼は私の顔を見た。

「さっさとここから出る」私はしぶしぶ従い、片足は廊下に出したが、外には出ずに戸口に立っていた。

軽口をたたいてもイーガン巡査の顔はこわばったままなので、トラスクはさらに相手に近づいて真面目に説教を始めた。「それだけじゃない、少しは考えてみる。今でもこれだけごたごたしているんだ。これ以上騒ぎを大きくしてどうしようってんだ？ こいつはおとなしく出て

いこうとしてゐるだろ、どうだ？ ほら、見てみる」イーガンは私を上から下までにらみつけ、首を横に振った。

「廊下のずっと向こうまで行くんだ、ウォーターマン」トラスクはエレベーターの方に向かつて大きな身振りをしてみせた。私はイーガンから目を離さずに、のろのろと足を運んだ。トラスクが私を追い立てるように廊下に出てきた。

「ウォーターマン、おまえと違つてな、あいつはまだガキなんだ。それに、同じくおまえと違つて、ほかにどうしていいかわからないんだよ。もつとも、職務上と言えど何をしても言い訳は立つがな」

「あいつはいつまで経つてもあんなふうにぴりぴりしてるだろうよ」私は言った。「いくら教えたつて無駄だよ」トラスクは肩をすくめた。

廊下に人がたまりはじめていた。制服警官がまたひとり、人をかき分けてすつ飛んできた。トラスクが脇にどいて中に入れる。私はその肩越しに室内が見えるように場所を変えた。

警官はドアを一步入ったところでイーガンに何事か小声で話している。私をじつとにらみながら相手の話を聞いていた彼は、小走りに窓に近づいた。

「奥さんが来しました。階<sup>した</sup>下で息子と一緒にいます。テレビで見たんだそうです」彼はいきなり大声で言った。

サーシャ・ケネディも驚いた顔をしたり、しかめ面してみせたりする間<sup>ま</sup>がなかった。グリアに全部聞こえてしまったのだ。

廊下まで彼の声が聞こえてきた。

「あいつに会わせろ」彼は叫んだ。「ここへ連れてこい。どこにいるんだ？　そこか、そこにいるのか。顔を出させろ」

ケネディは窓枠から降り、警官ふたりの背中を押して部屋の中央に戻ってきた。

「まったく。なんてことしてくれたの」トラスクに向かって彼女は言った。「このうすのろふたり、外に出してちょうだい。今すぐに！」トラスクは大急ぎで警官たちを廊下に押し出した。信じられないという顔をして、彼女は首を振っている。私はそっと部屋に入った。

「専門家のご到着を待っていて、本当によかったですよ」私は言った。

「うるさいわね！」

「そういう話し方も大学院でおぼえたんですか？」

私を無視して、彼女はふたたびトラスクに向かって言った。

「奥さんをここに呼びなさい。こうなったらほかに方法はないわ。あの人、とても興奮している」部屋を出ようとする刑事を、彼女が呼び止めた。「屋上の救助隊はどうなの？　もうすぐ用意ができるの？」

トラスクは首を振った。「屋上の縁が外へ張り出しているんです。そこからロープを垂らすと、窓から六フィートは離れてしまうということで。上からの手助けはあまり期待できませんね。彼らも待機してはいますが」

「奥さんを連れてきて」トラスクは急いで部屋を出ていった。グリアと話を続けようと、ケネ